

ナラティブ・ジェロントロジーの理論と研究動向

—Kenyon, G.らの枠組みを中心に—

Theory and Research Trend of Narrative Gerontology:
Focusing on the Framework of Kenyon, G. et al.

園部 友里恵*
Yurie SONOBE

1. 本稿の背景と目的

1. 1 背景：日本における老年学研究とナラティブ

超高齢社会を迎えている日本においては、ジェロントロジー（老年学）という学際的な学問への着目がなされ、研究が進められている。しかし、日本におけるジェロントロジーは、医学をはじめとする理科学系の研究が中心となっており、人文系の研究が弱いという現状がある。そうした中で、近年、当事者である高齢者の意識や実態についてより深い理解を求めて、ナラティブに関心が集まりつつある。

ナラティブとは、「語る」という行為と「語られたもの」という行為の産物（ストーリー）の両方を同時に含意する用語である。ナラティブ・アプローチとは、ナラティブという概念を手がかりにしてなんらかの現象に迫る方法であり、社会学、文化人類学、医学、看護学、臨床心理学、社会福祉学など、様々な学問領域において用いられている（野口, 2009）。本稿で扱うナラティブ・ジェロントロジー（narrative gerontology）も、老年学においてナラティ

ヴ・アプローチを援用するものである。しかし、日本において、ナラティブ・ジェロントロジーという用語の認知度はあまり高いと言えない。以下、わずかではあるが、ナラティブ・ジェロントロジーに触れている日本の研究を概観する。

日本における先行研究の中で、ナラティブ・ジェロントロジーの理論の特徴に関する記述がなされているものとして、荒井（2006）と川島（2006）を挙げることができる。荒井（2006）は、「老年学領域におけるこのナラティブの援用は、他の領域から多少遅れて1990年代以降になって登場することになる」と述べ、Kenyon, Clark, & de Vries（eds.）（2001）を「ナラティブと老年学の関係を正面からとらえた著作」と評価し、同書を参照しながらナラティブ・ジェロントロジーにおける理論的前提を以下の3点に整理している。

* 東京大学大学院情報学環

キーワード：ナラティブ・ジェロントロジー、ナラティブ・アプローチ、エイジング、ストーリーとしての人生、ケア。

①われわれ自身の物語性：

ナラティブ・ジェロントロジーでは、われわれは単なる生物学的存在でも、逆に社会的構築物でもなく、物語そのものでありまた物語的存在でもあるという前提に立つ。

②物語の構築性としての作為性／可変性：

物語は、客観的な事実をそのまま反映するのではなく、主観的な個人的経験として語られる。また物語は、われわれが自分自身について言及するさいには、感情や楽観／悲観等のバイアスを含み、「再叙述（restorying）」によって語り直すこともできる。

③物語の内包する本質的な矛盾：

われわれが物語的存在であるといったとき、一方でそれは、個人的経験を含むが、他方では社会的、あるいはインターパーソナルな文脈において意味を発見するものである。（荒井, 2006, p.71-72を参照）

川島（2006）は、回想法研究との関連でナラティブ・ジェロントロジーを捉えており、「社会文化的文脈については、老年学的一大潮流である、ナラティブ・ジェロントロジー（Kenyon & Randall, 1999; Ruth & Kenyon, 1996）が、回想法研究に新しい志向性を提供している」と述べ、本稿において後述するナラティブ・ジェロントロジーの5つの基本的前提（Kenyon & Randall, 2001）の中でも、ストーリーは制度的、社会文化的、対人的、個人的次元という、4つの相互連関する次元によって構成されているとする「多次元性」、意味は独特

で、個人的なものである一方で、同時に社会的・対人的文脈のうちにおいて構築あるいは発見されるものであるとする「逆説性」が、専ら語りの個人的側面にのみ焦点化してきた回想法研究に大いなる示唆を呈するものとして着目している。

また、研究方法論の観点からナラティブ・ジェロントロジーを紹介するものに堀（2006）がある。堀（2006）は、1990年代から21世紀にかけて生まれたエイジング研究の新たな動向として研究方法論の変化を挙げ、「以前は実験的研究や社会調査研究そして理論的研究という色分けがあったように思うが、最近ではケニヨン（Kenyon, G. M.）らのナラティブ・ジェロントロジー（narrative gerontology）に代表される、エイジングの自己物語論などが出てきている」と指摘する。そして、高齢者の多様な声を紡ぎ取り、それを意味づけしていくために質的研究の方法論の必要性を強調している。

その他、宗教学の領域においてナラティブ・ジェロントロジーに触れるものがある。マッキンレーとトレヴィット（2015）は「スピリチュアル回想法」と呼ばれる手法を紹介する中で、「「ストーリー」を構築したり活用したりすることへの学究的興味の高まりを受け、ナラティブ老年学narrative gerontologyは老年学のひとつの専門分野として確立した」と述べ、人生の後期や認知症におけるナラティブの重要性に注目し、認知症の人が見出す意味にふれる1つの方法として、ストーリーを取り上げている。

以上のように、日本では、2000年代半ば頃

からナラティブ・ジェロントロジーに触れる研究も見受けられる。しかし、ナラティブ・ジェロントロジーが海外においては確立された領域

であるとしながらも、その理論の詳細や研究動向については十分な紹介、検討がなされていないと言える。

1. 2 本稿の目的

本稿の目的は、欧米を中心に広がりが見られるナラティブ・ジェロントロジー（narrative gerontology）について、その理論の特徴や研究動向を整理することである。

以下、2章では理論とその展開、3章では研究動向をそれぞれ整理する。2章では、ナラティブ・ジェロントロジーの枠組みを提示したカナダの老年学者・Kenyonらの論考を中心に読み解き、その中で参照されている関連書籍・論文

にも遡りながら、ナラティブ・ジェロントロジーの理論およびその展開について整理する。3章では、Kenyonらがまとめたナラティブ・ジェロントロジーに関する論文集2冊に掲載されている論文を対象として、それらを内容に応じて分類することを通して、ナラティブ・ジェロントロジーという領域の中で行われている研究の特徴を明らかにすることを試みる。

2. ナラティブ・ジェロントロジーの理論と展開

2. 1 ナラティブ・ジェロントロジーの登場

Kenyon et al. (2001) によれば、ナラティブ・ジェロントロジーの起源は、James BirrenとHans Schrootsが始めた、エイジングのメタファーに関する研究に遡る。この研究は、国際学会でも取り上げられ、1991年にKenyon, Birren, & Schroots (eds.) *Metaphors of Aging in Science and the Humanities*が出版された。そして、この研究に関する小研究グループが、シュバルツバルト、ブレーメン、ブダペスト、ロサンゼルスで生まれた。こうした研究グループの活動から、1996年にはBirren, Kenyon, Ruth, Schroots, & Svensson (eds.) (1996) *Aging and Biography*が出版された。さらに2001年、ナラティブ・ジェロントロジーという用語を書名に含む初めての書籍

Kenyon et al. (eds.) *Narrative Gerontology: Theory, Research, and Practice*が出版された。同書は、the Canadian and the American Gerontology Associationsが開催したナラティブ・ジェロントロジーのシンポジウム参加者や、*Ageing and Society* (1996) と*Journal of Aging Studies* (1999) の2つのジャーナルにおける特集号への寄稿者による論文が集められたものである。同書の出版により、ナラティブ・ジェロントロジーという領域の特徴や方向性が提示され、当初ルートメタファーとして生まれたナラティブ・ジェロントロジーは、次第に、研究や実践における枠組みとして用いられるようになった (Medeiros, 2014)。

なお、ナラティブ・ジェロントロジーという

用語を初めて用いたのは、ヘルシンキ大学の老年心理学者Jan-Erik Ruthであるとされている (Kenyon & Randall, 1999; Kenyon et al., 2001)。Ruthは、1994年、スウェーデン語の論文「Det aldrande berättarjaget: Forsök till en narrative gerontologi (エイジングと個人的なストーリーテリング：ナラティブ・ジェロントロジーの試み)」 (*Gerontologia*, 8,

p.205-214.) を発表した。Ruthは、高齢期における創造性、情動性、パーソナリティに関する研究を進めてきており、1997年の冬、Kenyonらが所属するセントトーマス大学の客員教授に就任した。そして、それ以降、Kenyonらとともに、ナラティブ・ジェロントロジーの領域の中に自らの研究を位置づけてきた。

2. 2 ナラティブ・ジェロントロジーの目的と基本的前提

次に、ナラティブ・ジェロントロジーの代表的論者であるKenyonらの論考を読み解き、ナラティブ・ジェロントロジーの理論とその発展について整理する。

Kenyon et al. (eds.) (2001) は、エイジングのストーリー化された側面を研究対象とするための概念的枠組みや用語を発展させ、ナラティブ・ジェロントロジーの領域の地図を研究者と実践家に提供することを目的に刊行されたものである。同書は、ナラティブ・ジェロントロジーの顕著な特徴として、ナラティブを「データ」として用いるのみならず、我々の生活において物語のメタファーがどのように機能しているのかを考察すること、を挙げている。そして、ナラティブ・ジェロントロジーの主要目的の1つは、エイジングに関する見識と、我々がエイジングをどのように研究するのかという見識の両方をともに蓄積していくことであるとされている。

また、Kenyon & Randall (2001) は、ナラティブ・ジェロントロジーの基本的前提を5つに整理した。第1の前提は、人間は本来、ストーリーの語り手であり、聴き手であるという

ことである。Randall (1995; 2001) が指摘するように、人間はストーリーを持っているのみならず、人間自体がストーリーでもある。人間はストーリーにもとづいて思考し、知覚し、感じ、決心し、行動するため、ストーリーは、認知的、情動的、意志的な面を有している。すなわち、ナラティブ・ジェロントロジーでは、人間が単に生物学的存在としてや社会的につくられたものとしてではなく、伝記的な存在として捉えられている。こうした前提は、Kenyon et al. (eds.) (2001) が提示する「ストーリーとしての人生」(life-as-story) メタファーにも結び付いている。同書において、このメタファーは、理論、研究、実践、日常生活、それぞれの観点からエイジングを検討する方法を発展させるのに特に適したものであると捉えられている。

第2の前提は、人生やライフストーリーは、事実性と可能性という2つの要素によって特徴づけられるということである。事実性とは、後述する第4の前提に挙げられているような、社会的で構造的なもので、私であるというストーリーの外部にある側面を含むものである。可能

性とは、我々の人生の内部の側面に関わるものである。人生は変えることができ、選択や新たな意味や語り直し（restorying）（Kenyon and Randall, 1997）の影響を受ける。語り直しとは、自分のストーリーを語り、読み、語り直すことを通じて、可能性の感覚を高めるためのプロセスに言及する用語である。

第3の前提は、時間のもつ意味や性質は、物語としての人生と結び付いているということである。Kenyon & Randall（2001）は、時計時間（clock time）と物語時間（storytime）を分けて考えている。時計時間とは、直線的で閉鎖的な時間の捉え方であり、過去・現在・未来は個別に存在し、過去とは閉じられたものであると考えられている。それに対して、物語時間とは、とても個人的なものである。我々は、自身が思う人生の意味や重要性によって人生の出来事やテーマを整理しているが、その方法は特異で創造的なものである。物語時間では、そうした各人の方法が反映される。物語時間は、自身の事実性と可能性の感覚の組み合わせに強く影響される。すなわち、我々は、我々自身に時間というストーリーを語り、そのストーリーに従って生きている。時計時間における過去が変わらないものであるのに対して、物語時間では、再構成することで過去を変えていくことができる。

第4の前提は、ストーリーとしての人生には、相互に関連する4つの次元（①制度的次元、②社会文化的次元、③対人的次元、④個人

的次元）があるということである。①制度的次元には、社会政策、権力関係、経済状況などが含まれる。これらは事実性の一部であるが、実質的には、我々のストーリーを妨げ、我々の声を抑え、可能性の感覚を制限することもあり得る。②社会文化的次元には、エイジングや、定められた文化的な文脈の中でのライフコースに関する社会的な意味に言及がなされる。民族やジェンダーに関するストーリーも含まれる。③対人的次元とは、我々の人生は、家族や友人など、他者のライフストーリーと絡み合って形成されるということを指すものである。④個人的次元とは、ライフストーリーは個人の中で独自に意味や首尾一貫性がつくられたり、見出されたりするという事に関連したものである。

第5の前提は、ライフストーリーがもつ根本的な逆説性に関することである。ライフストーリーは、個人的な経験など、個人の内側から生まれる一方で、社会的な文脈や対人関係の中でストーリーの意味がつくられ、見出される。すなわち、我々は、自分を超越る大きな文脈の中で個人的なストーリーを創造しているのである。

Kenyon & Randall（2001）は、以上の5つの基本的前提を踏まえ、エイジングに関する全ての知識は「物語られた」ものであると述べている。そして、ナラティブ・ジェロントロジーでは、客観性を根拠のないものと捉え、あらゆる知識は比喩的、歴史的、文脈的なものであるというポストモダンの見識が採用されている。

2. 3 ナラティブ・ジェロントロジーの理論の展開

その後、Kenyonらは、上記の書籍をさらに発展させたものとして、Kenyon, G., Bohlmeijer, E. & Randall, W. (eds.) (2011) *Storying Later Life: Issue, Investigations, and Interventions in Narrative Gerontology*を刊行している。同書は、Kenyon et al. (eds.) (2001) で示されたナラティブ・ジェロントロジーの枠組みをさらに拡張させるために刊行されたものである。特徴としては、前掲書に比べ、より多様な領域の研究者が寄稿していることが挙げられる。特に、ナラティブ・ジェロントロジーに関する実践が先進的になされているオランダの老年学者・実践家らによる論考が複数見られる。また、「衰えのナラティブ」や認知症への言及など、老いに伴う身体の状態から生み出されるナラティブやケアに着目した考察がなされていることも特徴と言える。

2014年、Kenyon et al. (eds.) (2011) にも寄稿したMedeiros, K.が*Narrative Gerontology in Research and Practice*を刊行している。Medeiros (2014) は、ナラティブ・ジェロントロジーに関するこれまでの書籍や論文が、専門的なレベルから議論が始まっていることを踏まえ、初めてナラティブに触れる読者が、概念や課題などについて基本的な理解ができることを目指して刊行された。Medeiros (2014) は、「ナラティブ」や「ジェロントロジー」など、ナラティブ・ジェロントロジーの基盤となる概念を整理し、他の学問領域においてナラ

ティブがいかに扱われてきたのかを、人類学、人文学、医学、看護、心理学・精神医学、公共政策、ソーシャルワーク、社会言語学、社会学、の9つの領域ごとに概観している。そして、ナラティブ・ジェロントロジーにおけるナラティブには3つの基本的なタイプがあると述べている。

- ①肉体から離れたナラティブ（文書、書き起こされたストーリー、書かれたストーリーなど、語り手と聴き手が異なるナラティブ）。
- ②その瞬間のストーリー。語られるが、文書や記録になっていないストーリー、または、書き起こされるまでの瞬間のみ存在しているストーリー。
- ③決して大きな声で語られないにもかかわらず存在していたり、省略されたりするストーリー。（Medeiros 2014、p.33-34を参照）

加えて、ナラティブ・ジェロントロジーに関連する形態として、自分史、伝記、ライフストーリー、ライフレビュー、オーラルヒストリー、回想などを挙げ、それぞれの特徴が説明されるとともに、ナラティブ・データの取り扱いやインタビューの方法、ナラティブ研究に内在する権力や倫理の問題についても検討がなされている。

3. ナラティブ・ジェロントロジーの研究動向

次に、ナラティブ・ジェロントロジーという領域の中では、どのような研究が行われてきているのかを概観する。Kenyonらも指摘するように、ナラティブ・ジェロントロジーは、研究が実践と密接に結び付きながら蓄積されてきている。そこで、本稿では、実践研究に焦点を当てて、その研究動向や特徴を整理する。

本稿では、Kenyonらによってまとめられたナラティブ・ジェロントロジーという用語を書

名に含む論文集2冊（Kenyon et al. (eds.), 2001; 2011）に掲載されている実践研究の論文計15本を、実践の中にナラティブを取り入れる主なねらいがいかなるものかという視点から分類した。その結果、実践研究は、①自我の統合、②精神疾患の緩和、③高齢者と専門職の関係改善、④高齢者やエイジングに対する理解の深化、を主なねらいとする実践研究が行われていることが明らかになった。

3. 1 自我の統合

自分自身を受け入れ、自我を統合していくためにナラティブが用いられている。こうしたねらいのもと行われる実践研究の中で、いくつかの論文に見られたのが、エリクソンの発達段階論に関する記述である。これは、エリクソンが老年期の発達課題として挙げた「統合 対 絶望」に関連している。

Kuhl & Westwood (2001) は、末期患者へのナラティブ・アプローチの適用について、自我を統合し、自らの存在を受け入れるために、自らのライフストーリーの理解が有効であることが示されている。末期患者が自身のライフストーリーを理解することは、自らの人生を受け入れ、死への準備をしていくことへとつながっていく。

その他、ガイドッド・オートバイオグラフィー（guided autobiography）という手法に関するものとして、Shaw (2001) と Vota & de Vries (2001) がある。オートバイオグラフィー（自分史）が自分で自分の人生やその経

験を解釈したものであるのに対し、ガイドッド・オートバイオグラフィーは、「半構造化された項目を持つ、グループによるライフレビュー」であるとされている（de Vries et al., 1995）。

Shaw (2001) は、自分史的なライフレビューが老いをめぐる知識や英知の発達、自己実現を促すとして、ガイドッド・オートバイオグラフィーに着目している。そして、Birrenらによるガイドッド・オートバイオグラフィーの開発の経緯を整理し、ガイドッド・バイオグラフィーのねらいとして、個人の統合をはじめ、生涯発達、エンパワメントがあると述べている。

Vota & de Vries (2001) は、中高年者を示すサードエイジ、情報基盤経済への移行を示すサードウェーブ（Toffler, 1991）、家庭と職場以外のもう1つの場所を示すサードプレイス（Oldenburg, 1991）という3つの概念をもとに、中高年者のサードプレイスとしてのサイ

バースペースに着目し、オンラインでのガイドド・オートバイオグラフィー実践の試みについて紹介している。オンラインであっても対面式と同様、自己理解が深められたことが示されている。

また、Tromp (2011) は、自分史的なナラ

3. 2 精神疾患の緩和

精神疾患を緩和するためにナラティヴが用いられることもある。そこでキーワードの1つとなるのが「語り直す (restory)」(Kenyon & Randall, 1997) ということである。

Osis & Stout (2001) では、ナラティヴ・セラピーの方法やその起源、そして高齢者への使用が論じられている。ナラティヴ・セラピーでは、問題の捉え方を語り直すことで変化させ、回復につなげていくことが目指されている。すなわち、ある問題が生じているときにそれを個人の中にあるものとして捉えるのではなく、外在化することによって、「問題そのものが問題である」と捉える。そうすることで、個人の狭まっていたアイデンティティを広げていき、緩和していくことができる。

Bohlmeijer & Westerhof (2011) は、オランダで発展している回想を用いた介入について、高齢者向けのメンタルヘルスケアとして回想を行うための枠組みを提示している。具体的な介入の事例の1つとして、「Looking for

ティヴインタビューの分析方法を紹介している。複数の老人ホームにおいてライフストーリーブックの作成を行い、その実践の前後で語られる内容と自我の統合との関連を分析している。

meaning in life」という名称のライフレビュー・セラピーのプログラムが紹介されている。このプログラムは、55歳以上のうつ病を持つ人々を対象としたものであり、自己を変化させようという気を起こし、うつ病の症状を緩和させることが目指されている。感覚を呼び戻すエクササイズ、創造的な活動、グループディスカッションによって構成されており、絵や詩を取り入れるなど、非言語的なアプローチも含むものである。

Steunenbergh & Bohlmeijer (2011) は、うつ病を持つ高齢者のトレーニングとして自分史的な記憶 (autobiographical memory) に着目し、ライフレビューの実践において、ポジティブな記憶を問うことによって、ポジティブな方向へと語り直すことによって、高齢者は自分を受け入れていくようになり、心の状態の改善、うつ症状の緩和へとつながっていく。

3. 3 高齢者と専門職の関係改善

高齢者が専門職と関わる際、そこには情報の非対称性が生まれる場合がある。こうした高齢者の専門職との関係を対等でフラットなものへ

と改善するために、ナラティヴを取り入れる現場について描いた論文が見られる。専門職の種類としては、医療、看護、介護関連のものが

あった。

Clark (2001) は、医療、カウンセリング、リハビリテーションという3つの現場におけるナラティブ・アプローチの可能性について論じている。そして、その3つに共通するものとして、病気の性質の変化と医療従事者の役割の変化に着目する。かつて医者などの専門家に決定権があったが、近年では患者の要望が重視されるようになってきている。そのために、医療従事者が患者にとっての病気の経験の意味を理解する必要が生じており、患者のナラティブへの関心が高まっていると指摘されている。

Gass (2001) も、高齢者のヘルスケア実践においてナラティブを用いることによって、患者とケア提供者の間の見方の違いがもたらす影響に気づくことができると述べている。そして、ナラティブ・ナレッジとサイエンティフィック・ナレッジという知の体系の違いや、I-Youの関係とI-Itの関係の違いについて論じながら、患者とケア提供者の関係を対等なものへと改善していくことが、患者中心の臨床法へと結び付いていくと指摘している。

Hallberg (2001) は、看護の領域における患者理解の方法としてナラティブ・アプローチに着目している。Hallberg (2001) は、看護スタッフの役割として、患者の語り直しを促すことを挙げている。また、看護師が無意識的に患者のストーリーを書いており、そのことが患者

をいかに理解し行動するかを決定することへとつながるとも指摘している。

また、van den Brandt-van Heek (2011) は、認知症高齢者、その家族、施設のスタッフの関係をとり上げ、スタッフが認知症高齢者に対して行う問いかけに着目した方法「Living and Working with a Story」を開発した。この方法は、認知症患者が弱点として抱えている質問を避ける重要性を強調したもので、この方法を通じて、認知症患者は自身のライフストーリーを語ることに刺激を受けると言う。認知症の人もそうでない人も自身のストーリーを語るができる点に着目し、スタッフが認知症高齢者と会話し、良い関係を築くための要素が紹介されている。

Ubels (2011) は、オランダの国家的な高齢者ケアの協会である「ActiZ」の取り組みについて紹介している。ActiZでは、①高齢者個人のアイデンティティを認識し、敬い、支えることがケア業界の中核として理解されなければならないこと、②ナラティブへの着目は、ケア提供者が、高齢者をケアの受け手と見なすことをやめ、対等な関係を生み出すことへとつながること、③ケアの組織は、ケア提供者とケアの受け手が出会い、人生や活動の質を共に創り上げていく社会的な構造を有する「ナラティブ・コミュニティ」と捉えることができること、の3点が目指されている。

3. 4 高齢者やエイジングに対する理解の深化

高齢者ではない人々が、高齢者という存在やエイジングという現象に対する理解を深めるために、ナラティブが用いられることがある。な

お、これは、前述した「高齢者と専門職の関係改善」を達成するための前提としても捉えることができる。

高齢者向けのメンタルヘルスケアとして回想を行うための枠組みを提示しているBohlmeijer & Westerhof (2011) は、先述したライフレビュー・セラピーの事例の他、もう1つの具体的な介入事例として、子ども（成人）がメンタルヘルスを抱える親（高齢者）に対してライフレビュー・インタビューを行うというものも挙げている。この事例においては、ライフレビュー・インタビューを通じて、親子の感情的な関係が深まるとともに、子どもに対して実施された事後インタビューの結果からは、親の人生に対しての理解や結び付きが深まったことが明らかにされている。また、プロフェッショナルな介護者でなくとも回想やライフレビュー・インタビューの実施が可能であることもこの事例から見出されている。

Westerhof (2011) は、「Green and Gray」と呼ばれる教育プログラムについて紹介している。このプログラムでは、外集団に対するステレオタイプの見方を改善し、若者と高齢者の相互理解を促すための手段としてライフストーリーが用いられている。中等・高等教育において実施されていることから、将来のヘルスケアやソーシャルワークの担い手を育てるプログラムとして期待されている。

4. 考察と今後の課題

前章では、Kenyonらが刊行したナラティブ・ジェロントロジーに関する論文集について、ナラティブが実践の中でどのようなねらいのもと用いられているのかを整理した。

ここで、2001と2011の論文集を照らし合わ

Noonan (2011) は、介護施設におけるナラティブ・ケアのプログラム「Celebrating Our Stories」を開発した。このプログラムは、地域の高校生も含め、様々な人々の伝記を作成するもので、目的は、利用者たちが持つ豊かな歴史や経験を、彼らのストーリーを聴き、記録することによって賞賛すること、本当にホリスティックな感覚で利用者を見るために、スタッフ、ボランティアなどあらゆる人が連携することによって、エイジング、特に介護施設におけるエイジングに関する前提に異議を唱えること、であった。

Kenyon (2011) は、多様な世代、心身に困難を抱える者であっても取り組めるナラティブ・ケアとして太極拳を取り上げている。Kenyon (2011) は、考えずに空っぽな状態を保ち、状況に身を任せることで、自身のストーリーの中に静寂や平和が生まれ、その場にいる人々が闘うことなく受け入れ合える状況を生み出せると述べている。このように、「苦しみ」や「喪失」の意味や、そうした視点からのナラティブのあり方を、参加者の様子に注意を払いながら捉え直していく筆者の様子が描かれている。

せると、2001では、医療を中心とする現場におけるナラティブ・アプローチの適用について論じたものや、ナラティブに関連する方法を紹介するものが中心であった。それに対し、2011では、課題が具体化され、プログラムの

開発などが中心となっている。また、2011では、個人や対人関係に焦点を当てたものに加え、地域コミュニティや国家レベルの機関においても、ケアをキーワードにナラティブ・ジェロントロジーをめぐる実践研究が進められていることがわかる。さらに、言語を中心に構成されがちなナラティブ・ジェロントロジーの領域において、例えばKenyon（2011）が太極拳をナラティブ・ケアと見なすことで、身体にも着目したナラティブ実践を検討するなど、語らない（語れない）というナラティブへの注目も見られる。

次に、ナラティブ・ジェロントロジーの実践領域の偏りについて指摘したい。ジェロントロジーは、エイジングをめぐる学際的な学問領域であるとされている。しかし、本研究で扱ったナラティブ・ジェロントロジーの実践研究では、医学や福祉の視点からのものが主流となっていた。ケアという観点に焦点化される場合、病院や介護施設で生活・利用する高齢者を対象とした研究や実践が中心となってしまう。そうした医療や福祉の現場以外で暮らす高齢者を対象としたナラティブ実践とはいかなるものだろうか。例えば、成人学習の領域において、学習とナラティブの関連が論じられるなど（Rossiter & Clark, 2010）、研究や実践が進

められてきている。こうした成人を対象としたナラティブ学習の理論が、高齢者の場合にはいかに適用可能かを検討するとともに、医療や福祉の対象とされてきた病院や介護施設で暮らす高齢者の活動自体も、学習という視点から問い直していくことで、ナラティブ・ジェロントロジーの領域をさらに拡大させることが可能であると考えられる。

最後に、今後の課題として2つ挙げる。本稿では、欧米を中心に蓄積が見られるナラティブ・ジェロントロジーの理論とその研究動向について、その枠組みを提示したKenyonらの論考、および彼らがまとめた論文集を中心に研究動向を整理した。今後、ナラティブ・ジェロントロジーに関する論文のレビューを継続し、ジェロントロジー研究におけるKenyonらの枠組みの位置づけや特徴を検討していく必要がある。

また、日本においても、ナラティブ・ジェロントロジーという用語は十分に浸透していない一方で、類似の研究は多くなされてきている。今後、そうした日本の研究動向を整理し、本稿で詳述したナラティブ・ジェロントロジーと照らし合わせながら、日本における研究や実践の特徴を見出していく必要がある。

謝辞

本研究は、「福武ホールアフィリエイトプログラム」における「医療法人社団・医風会」との共同研究の一部として実施されたものです。また、本稿を執筆するにあたり、大阪教育大学・堀薫夫教授に大変お世話になりました。ここに記し、謝意を表します。

参考文献

- 荒井浩道 (2006) 「心理－社会的エイジングと老いのナラティブ」堀薫夫編著『教育老年学の展開』学文社, p.60-77.
- Bohlmeijer, E., Kenyon, G. & Randall, W. (2011) Afterword: Toward a Narrative Turn in Health Care, In Kenyon, G., Bohlmeijer, E. & Randall, W. (eds.) (2011) *Storying Later Life: Issue, Investigations, and Interventions in Narrative Gerontology*, Oxford University Press, p.366-380.
- Bohlmeijer, E. & Westerhof, G. (2011) Reminiscence Interventions: Bringing Narrative Gerontology into Practice, In Kenyon, G., Bohlmeijer, E. & Randall, W. (eds.) (2011) *Storying Later Life: Issue, Investigations, and Interventions in Narrative Gerontology*, Oxford University Press, p.273-289.
- Clark, P. (2001) Narrative Gerontology in Clinical Practice: Current Applications and Future Prospects, In Kenyon, G., Clark, P., & de Vries, B. (eds.) (2001) *Narrative Gerontology: Theory, Research, and Practice*, Springer Publishing Company, p.193-214.
- de Vries, B., Birren, J., & Deutchman, D. (1995) Method and Uses of the Guided Autobiography, in Haight, B. K. & Webster, J.D. (eds.) *The Art and Science of Reminiscing*, Taylor and Francis, p.165-177.
- Gass, D. (2001) Narrative Knowledge and Health Care of the Elderly, In Kenyon, G., Clark, P., & de Vries, B. (eds.) (2001) *Narrative Gerontology: Theory, Research, and Practice*, Springer Publishing Company, p.215-236.
- Hallberg, I. (2001) A Narrative Approach to Nursing Care of People in Difficult Life Situations, In Kenyon, G., Clark, P., & de Vries, B. (eds.) (2001) *Narrative Gerontology: Theory, Research, and Practice*, Springer Publishing Company, p.237-272.
- 堀薫夫 (2006) 「エイジングの歴史」堀薫夫編著『教育老年学の展開』学文社, p.2-43.
- 川島大輔 (2006) 「回想法研究の課題と展望：高齢者の物語の意味への接近」『教育方法の探究』（京都大学）9, p.25-32.
- Kenyon, G. & Randall, W. (1997) *Restorying Our Lives: Personal Growth through Autobiographical Reflection*, Praeger.
- Kenyon, G. & Randall, W. (1999) Introduction: Narrative Gerontology, *Journal of Aging Studies*, 13 (1) , p.1-5.
- Kenyon, G., Clark, P., & de Vries, B. (eds.) (2001) *Narrative Gerontology: Theory, Research, and Practice*, Springer Publishing Company.
- Kenyon, G. & Randall, W. (2001) Narrative Gerontology: An Overview, In Kenyon, G., Clark, P., & de Vries, B. (eds.) (2001) *Narrative Gerontology: Theory, Research, and Practice*, Springer Publishing Company, p.3-18.
- Kenyon, G., Bohlmeijer, E. & Randall, W. (eds.) (2011) *Storying Later Life: Issue, Investigations, and Interventions in Narrative Gerontology*, Oxford University Press.
- Kenyon, G. (2011) On Suffering, Loss, and The Journey To Life: Tai Chi as Narrative Care, In Kenyon, G., Bohlmeijer, E. & Randall, W. (eds.) (2011) *Storying Later Life: Issue, Investigations, and Interventions in Narrative Gerontology*, Oxford University Press, p.237-251.
- Kuhl, D. and Westwood, M. (2001) A Narrative Approach to Integration and Healing Among the Terminally Ill, In Kenyon, G., Clark, P., & de Vries, B. (eds.) (2001) *Narrative Gerontology: Theory, Research, and Practice*, Springer Publishing Company, p.311-330.
- マッキンレー, E., トレヴィット, C. (2015) 「スビリチュアル回想法」(馬籠久美子訳)『現代宗教』2015 国際宗教研究所 p.121-149.
- Medeiros, K. (2014) *Narrative Gerontology in Research and Practice*, Springer Publishing Company.
- Noonan, D. (2011) The Ripple Effect: A Story of the Transformational Nature of Narrative Care, In Kenyon, G., Bohlmeijer, E. & Randall, W. (eds.) (2011) *Storying Later Life: Issue, Investigations, and Interventions in Narrative Gerontology*, Oxford University Press, p.354-365.
- 野口裕二編 (2009) 『ナラティブ・アプローチ』勁草書房
- Oldenburg, R. (1991) *The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Community Centers, Beauty Parlors, General Stores, Bars, Hangouts, and How They Got You through the Day*, Paragon House.
- Osis, M. and Stout, L. (2001) Using Narrative Therapy with Older Adults, In Kenyon, G., Clark, P., & de Vries, B. (eds.) (2001) *Narrative Gerontology: Theory, Research, and Practice*, Springer Publishing Company, p.273-290
- Rossiter, M. and Clark, M. (eds.) (2010) Narrative Perspective on Adult Education, *New Directions for Adult Continuing Education*, 126. (邦訳：ロシター, M., クラーク, M. (2012) 『成人のナラティブ学習：人生の可能性を開くアプローチ』（立田

慶裕ほか訳) 福村出版。)

- Shaw, M. (2001) A History of Guided Autobiography. In Kenyon, G., Clark, P., & de Vries, B. (eds.) (2001) *Narrative Gerontology: Theory, Research, and Practice*, Springer Publishing Company, p.291-309.
- Steunenberg, B. & Bohlmeijer, E. (2011) Life Review Using Autobiographical Retrieval: A Protocol for Training Depressed Residential Home Inhabitants in Recalling Specific Personal Memories, In Kenyon, G., Bohlmeijer, E. & Randall, W. (eds.) (2011) *Storying Later Life: Issue, Investigations, and Interventions in Narrative Gerontology*, Oxford University Press, p.290-306.
- Toffler, A. (1991) *Future Shock*, Bantam Books.
- Tromp, T. (2011) Older Adults in Search of New Stories: Measuring the Effects of Life Review on Coherence and Integration in Autobiographical Narratives, In Kenyon, G., Bohlmeijer, E. & Randall, W. (eds.) (2011) *Storying Later Life: Issue, Investigations, and Interventions in Narrative Gerontology*, Oxford University Press, p.252-272.
- Ubels, G. (2011) Implementation of Narrative Care in The Netherlands: Coordinating Management, Institutional, and Personal Narratives, In Kenyon, G., Bohlmeijer, E. & Randall, W. (eds.) (2011) *Storying Later Life: Issue, Investigations, and Interventions in Narrative Gerontology*, Oxford University Press, p.319-337.
- van den Brandt-van Heek, M. (2011) Asking the Right Questions: Enabling Persons with Dementia to Speak for Themselves, In Kenyon, G., Bohlmeijer, E. & Randall, W. (eds.) (2011) *Storying Later Life: Issue, Investigations, and Interventions in Narrative Gerontology*, Oxford University Press, p.338-353.
- Vota, R. and de Vries, B. (2001) Guided Autobiography in Cyberspace, In Kenyon, G., Clark, P., & de Vries, B. (eds.) (2001) *Narrative Gerontology: Theory, Research, and Practice*, Springer Publishing Company, p.331-351.
- Westerhof, G. (2011) "Green and Gray": An Educational Program to Enhance Contact Between Younger and Older Adults by Means of Lifestories, In Kenyon, G., Bohlmeijer, E. & Randall, W. (eds.) (2011) *Storying Later Life: Issue, Investigations, and Interventions in Narrative Gerontology*, Oxford University Press, p.307-318.



園部 友里恵 (そのべ・ゆりえ)

【専攻領域】生涯学習論、高齢者教育、演劇教育

【主たる論文】

園部友里恵 (2015) 「高齢者の演劇活動の展開：活動のねらいに着目した新聞記事の分析から」『演劇学論集：日本演劇学会紀要』60、p.95-114.

園部友里恵 (2015) 「地域の学びの場におけるインプロ（即興演劇）の応用：「豊四季台くるるセミナー」におけるインプロ講座を事例として」『社会教育』p.28-33.

【所属】東京大学大学院情報学環 特任研究員

Theory and Research Trend of Narrative Gerontology: Focusing on the Framework of Kenyon, G. et al.

Yurie SONOBE*

Recently, narrative approach has been used in various fields. The purpose of this article is to clarify the features of the theory of narrative gerontology, and to review the practical research on it.

Narrative gerontology is an emerging sub-field within the multidisciplinary field of gerontology. Kenyon and his colleagues, who are gerontologists in Canada and several other countries, contributed toward of a conceptual framework of narrative gerontology in 1990s. They explored the meaning of aging from the “inside” by using the “life-as-story” metaphor.

According to Kenyon and Randall (2001), narrative gerontology presupposes a set of five basic assumptions: 1) storytelling is a fundamental aspect of being human; 2) lives as stories are made up of both facticity and possibility; 3) the meaning and nature of time are connected to our lives as stories; 4) our lives seen as stories that involve the four interrelated dimensions of the structural, sociocultural, interpersonal, and personal dimension; and 5) there is a fundamental paradoxicality about our lifestories. Therefore, narrative gerontology embraces the postmodern insight, and challenges the positivist views of aging.

Another feature of narrative gerontology is that the research is closely related with practice. Therefore, this article examined the trend of the practical research. As a result, the themes were classified into four types: 1) ego-integrity; 2) alleviation for symptoms of mental diseases; 3) improvement of relations between older persons and professionals; and 4) deepening understanding of aging.

Narrative gerontology will provide meaningful implication for the super-aged society of Japan.